【ねがいましては】

平成１９年１０月２５日　　*KYOWA SCHOOL*
第２０４号

「人らしさ」

ー先生、きょうの算数の時間に優子さんが泣くぐらいおこったでしょう。
優子さん、顔真っ赤にして泣いていたよ。いつも先生がおこった時、一つのことを思うんだよね。
あのね。前に優子さんが「先生、いやや」って言った時から、一つのことを思うんだよね。
それは“生徒が学校をきらいになる原因の一つは先生のせいである”ってこと（これはテレビでいっていた）。
それからね先生。優子さんをおこっている時、頭たたいたでしょ。べつにたたくことないじゃない。
先生はいつも橋永くんに
「暴力使わんと口でいっしょうけんめい言え」って言ってるでしょ。
それと同じで、たたかなくても口で言えばいいじゃないの。
そして、先生、優子さんに
「なみだに負けとる」って言ったけど、先生が、優子さんをたたいたから、よけい泣いてしまったんじゃないの。
さいごにききたいこと。
『頭たたいたら何でもすなおになれるか。必ず答えろ！』

灰谷健二郎著　「優しさとしての教育」より・・・角川文庫

ここまでの内容ですと、感情にまかせて動いてしまいながらも威厳など微塵もない教師。かなり過激な子たちに取り囲まれている教師。という感があります。もっと違った受け取り方をされた方もいるでしょう。
その後、この優子さんは先生宛に手紙を書きます。

ーおこられたり、なかされたことは、もうなにも思っていません。
まえ、日記で先生とやくそくしたのに、やくそくをやぶってしまった。
とても自分でも、けっしんしたことを守れなくて、すごく、あのときいえばよかったなと、こうかいしています。
はたしは（わたしは）一年から四年までは、ずいぶん弱い子でした。でも五年生になると、すごく、だんだん強くなりました。
四年で同じ組だった友だちに、四年とかはすごく弱かったのにつよくなったね、と言われたからです。
もう、これからは、いいかっこしではなく、自分が思ったことは思ったとうり（とおり）に言うようにします。

一人の先生と、ひとりの生徒が、深いこころの絆で結ばれていたことがわかります。
先生はそんな優子さんの成長を幼い頃から真剣に見つめ続けてきた。そして真剣に訴え続けてきた。周りの反応などどうでもいい、とにかく今が大事、今伝えなくて、いつ伝えるのか・・・その気持ちがしっかりと伝わったとき、「この子に出会えて本当に良かった。」と、思えるのではないでしょうか。そしてもちろん、この生徒も「先生に出会えてよかった・・・。」
そして優子さんを心配するクラスメートたちからの真剣な抗議・・・。先生と生徒がひとつになっていなければ出せない抗議でしょう。子どもたちがいつも先生を心の中で隣に置いているからこそ言えたのかもしれません。精一杯に生きている世界があります。
先生が真剣に生徒の中に飛び込んでゆく。『あなたたちのとなりで、真剣に生きてみたいのです。』先生も生徒たちも『勇気』が感じられます。
人のために生きられるって素晴らしい・・・。家族の中に自然に流れているものと共通しているような気がいたします。どう誤解されても、本当のことはひとつ、本当のこころはひとつ、そのこころを真剣にぶつけることは、子の成長には必要なことだと思います。根気よく伝え続けるしかありません。
『人らしさ』・・・『弱さ』なのかもしれません。弱さを認めて初めて、また人と人は近づくことができるのかもしれません。
今、子どもたちは寂しがっているような気がしてなりません。本気でものを言ってくれる親を必要としているのかもしれません。何かどこかで遠慮しているような・・・。子どもはいつも、お母さんや、お父さんや、お兄ちゃん、お姉ちゃん・・・家族の腕の中で安らぎを感じていたいのです。
ここに通う子たち、なぜそんなに助け合うのですか？　なぜそんなに優しいのですか・・・？
私が一番好きな光景、くりたのランチ講習のときに、全員で大きな声で「いっただきまーす。」って、お昼をいただく瞬間です。よく中学生に言われます。「先生、妻に逃げられた男が、たくさんの子どもを面倒見ているみたい・・・。」うれしい一言です。何回でもありがとう。また書いてしまいました。